
その時歴史は動いたか？

如月藤司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その時歴史は動いたか？

【Nコード】

N1968J

【作者名】

如月藤司

【あらすじ】

事の発端はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。巻き込まれたのは「神の世界」の住人だった。やがて歴史の大河はかすかな綻びから決壊する。

- 01 賽は投げられた

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、四十九の誓約を司る暁の王、紅き月、黒き太陽、星辰の盟約を悉く果たせ……」

わずかな光も差し込まない、陰鬱をそのまま表現したような部屋の中央。

存在する灯りはすべてろうそくの火であり、その頼りなくも唯一の光によって、床に彫られている幾何学的な文様を確認することができる。

幾何学的な文様——魔方陣の上で、揺れる炎に照らし出された金色の少女が、鈴の音を思わせる声で何事かを唱えていた。

「……白西の雪嵐、黒北の鉄雷、双午の狭間で彷徨いし方天の剣！」

声は徐々に熱を帯び、それまで緩やかに対流していた魔力が呼応するように加速し、室内は局地的な暴風となった。

これほどの強風ではろうそくなど役目を果たせるはずもないが、だが、炎は揺らめきこそすれ消える様子はない。

少女の瞳は陶然として、目的すらも忘れているのではないかと思わせるほどの狂気がちらついている。

「主の求めに応じ悉くを焼き尽くせ！ 万象の神よ来たれ！」

最後の一説を唱え終わるやいなや、魔力の渦が一際激しくなり、周囲に積み上げられていた書物までもが乱れ飛ぶ。

悠久よりも長い一瞬。

急速に集束した魔力が室内を光で染めた。

「……………」
「……………」

光が収まると明度が反転する。

吹き荒ぶ風ですらものともしなかった炎は消え去り、小さな世界は例え眼前に手をかざそうとも視認することの叶わぬ黒が支配していた。

特別暗闇でも目の利く少女も、光量がゼロでは何も見えない。

突き出した掌の上で魔力を光に変えた。

ばらばらに飛び散った紙、崩れた書物、その他道具類もまんべんなく床に散りばめられている。

浮かび上がった部屋は惨々たる状況だったが、それ以外に変わったところは見当たらなかった。

「……ヨオ、御主人」

「……言うな」

「ヤッパリ神ナンカラ喚ブノ八御主人ノ柄ジャネーッテコトダ」

「言うなと言っただろう！」

傍らで浮いている人形に八つ当たりをはじめる少女。

従者である人形は、落ち込む主人を不器用ながら励ましているのだろう。

ある程度の才能を持つものが研鑽を積みれば悪魔召喚などは比較的容易く行使できるが、少女が行おうとしていたのは魔法世界においても伝説として扱われるような、神話級の神を顕現させようという試みだった。

それはあえなく失敗に終わったようだが、そもそも体系化されていないものを独力で構築したのだ、失敗という事実よりもここまでの経過にこそ少女の真価が窺える。

人形とひとおりの罵詈雑言を応酬した少女は、冷静さを取り戻

し改めて魔方阵を俯瞰する。

「フン、やはり東洋魔術を組み込むのは難しいな。このラインさえうまく流れれば闇の魔法にも応用が利くのだろうが……」

「マダ研究スルノカ？ ソロソロ金ガ危ネーゼ」

「いや、ひとまず一定の成果は見た。あとはまたどうしようもなく暇になったら考えるさ」

「ジャアマタ旅ニ出ルンダナ」

「幸い今夜は満月だ。酒も悪くないが、旅立ちにもそれなりの風情が必要だろう？」

一度だけ物が散乱した室内を眺め回すと、鋼鉄を切り出した冷たい扉へと足を向けた。

少女——エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは思う。

強く、もっと強くなればアイツに届くだろうか、と。

- 01 賽は投げられた（後書き）

はじめまして、如月です。

今回「ネギま・オリ主迷い込み」というベタベタなファンフィクションを書かせていただきました。

実は物書きは私的な範囲でやっていたのですが、二次創作は初挑戦となります。

至らないところもあるかと思いますが、その際は一言お声がけいただければ誠心誠意解決策を講じる所存です。

少しでも面白いものをお届けできたらいいなあ、と思っています。

*魔法などのルビについて

基本振りません。

何故かという上万が一オリジナル魔法なんて出してしまった日には（早速出てますがね）ラテン語と古代ギリシャ語を勉強しなくてはならなくなるからです。

原作を知らずに読んでくださった方には申し訳ありませんが、原作を知っている方は各々脳内翻訳なり次善の対処をしていただきたく存じます。

00 日常からの逸脱

いいか？

今日起きたことをありのままに話すぜ。

出席チェックの厳しい朝イチの講義を受けるためだけに大学に来た俺は、いつもどおり窓際真ん中あたりの微妙な席に座っていたのさ。

いつもどおりじゃなかったことと言えば、常に俺のそばに付きまとっている幼馴染が来ていなかったことぐらいだ。

で、出席票も無事出し終えたしさあ寝ようか、と思っていたところで、案の定寝坊した幼馴染が駆け込んできた。

うつとおしげに名簿を確認する教授にびよびよこ頭を下げると、バツの悪そうな笑顔で通り道の友人たちに挨拶しつつ俺のいるほうへ歩いてくる。

俺は挨拶するのも面倒に感じるぐらいの睡魔に襲われていたから、軽く目だけで意思の疎通を図ろうと思ったんだ。

——そいつが俺を透り抜けるまでは。

何を言ってるのかわからないと思うが、俺にもわからないんだ。

俺の座る位置は毎回ほとんど決まっている。

だからあいつは俺を確認しなくてもここに来ることはできるだろう。

でも、普通なら俺を透り抜けたりしない。

例えば俺が何かマズいことをやらかして無視されたなら、いや、そんなことは未だかつてなかったが、まだそのほうがわかりやすい。確認してくれ。

俺を「通り過ぎた」んじゃない。

まるで俺が存在していないかのように、「透り抜けた」んだ。

それはもう、言葉では表現できない感覚だった。
総毛立つ、冷や水を浴びる、他にも色々似た言葉はあるかもしれないが、それらの感覚をひとまとめにして煮詰めた感じだ。

混乱した。

だってそうだろう？

人はぶつかつたら多少なりと痛いモンだ。

それが「ぶつからない」ってどういうわけだよ。

幼馴染に声をかけた。

テキストを開いて、俺には理解できない教授の話に聞き入っている。

全く反応を示さない。

無視されているとかそういう種類じゃない。

そして次の瞬間、そいつは目の前に座っている友人と決定的な会話を始めた。

「……ねえ、なんかいつもは隣に誰かいた気がするんだけど」

「はあ？ あんたいつも講義中はひとりでいるじゃない。まだ寝惚けてるの？」

「走ってきたから結構冴えてると思うけど……気のせいかな」

「うわ、なんか怖っ」

教授が無意味な咳を連発し、ふたりは慌てて正面に向き直る。

直感的に理解した。

俺は見えておらず、俺に関する記憶も無くなったのだ、と。

そう認識したとたん、体は粘着質の泥が絡みついたように重くなり、強烈な眩暈とともに意識が漂白していったんだ。

さて、落ちる夢って見たことないか？

ビクツとして目が覚める、あの忌々しい夢だ。

俺はスカイダイビングの経験がなかったから、漠然と同じような感じかな、と思ってたんだけど。

実際落ちてみると趣が違ってもんだ。

それどころじゃねえの。

現実逃避して今日を振り返ってしまいうぐらいおつかねえ。

気がつくともう落ちていたわけけども。

最初は衛星写真のようだった景色も、今は航空写真くらいのスケールで俺の眼下に迫っているのです。

まあそれ以前にこの高度は酸素とか気温とか諸々。

なんで俺死んでねえの？ とか、むしろもう死んでんじゃね？

とか、それこそ走馬灯のように考えてみたものの、どっちにしろ俺と地面の距離がゼロになれば一緒にゃねえか、という結論に至る。

どうせなら落ちるまで意識なくしてればよかったのに。

できればひっそりと死にたいもんだが、どうにかならんかね。

というか、なんだあのでかい木は。

どうやら俺はそこ目掛けて落ちている気がする。

もしかしたら枝とかが緩衝材になって助かるかもしれないな。

いや、樂觀するのはよそう。

むしろこの速度だ、柔らかい木の枝でも立派な凶器になりうるじゃないか。

万事休す、だ。

もしかしたら父さんも母さんも俺のこと忘れてるだろうけど、先立つんでごめんなさい。

……。

…………。

あれ？

痛くない。

観念して閉じていた目を、恐る恐る開いてみた。

「木が……光ってる？」

周りを確認すると、淡い光が俺を包み込むように明滅している。

イメージは空飛ぶ城の青い石のようだが、今俺と共にゆっくり地面に降りていく光は黄緑色だ。

まるで蛍の群れの中に紛れ込んだような、そんな幻想的な光景。

目を開けたところからたつぷり一分ほど、緩やかな空の旅を堪能して地面に足を着けた。

光はそれこそ蛍のようにふわふわと消えていき、やがて月夜の静寂に満たされる。

それにしても大きい木だ。

木というよりも、樹か。

ちよつと見上げててもその大きさがおかしいことぐらいしかわからない。

それに光るし。

幹に手をついてぐるっとひと回りしてみる。

直径で二十メートルくらいあるか？

確か屋久杉なのでかいので五メートルくらいだったような気がするが。

「この樹なんの樹不思議な樹、ってか」

「世界樹だよ」

全く想像していなかった方向から声かけられた。

驚いて飛び上がってしまったが、なにより独り言に返事をされた
ほうが恥ずかしい。

表面上取り繕って声のほうを見る。
背の高い、眼鏡をかけた男だった。

「……世界樹？」

「そう、この学園都市ができる前からあって、正確な樹齢もわ
からない、ということだ。誰が呼び始めたのか、そう呼ばれている」

男は人好きのする笑顔を浮かべて隣に並んだ。

観光客、って雰囲気じゃなさそうだな。

月の角度からして日付が変わる前ぐらいだろうが、こんなうす
寂しい場所にひとりで来るってのはよほど酔狂だと思っただが。

状況的には人のこと言えねえけどな。

しばらく無言のまま時間だけが過ぎていく。

胸ポケットから煙草を取り出して火を点けた。

「あ、タバコ苦手かい？」

「いえ」

馴れた手つきで箱から一本引き出し、抜き取って口にくわえると
ライターに火を入れる。

君もどう？ と箱を差し出されたので一本だけいただくことにし
た。

なんだかレベルの高いホストのような動作でライターを差し出さ
れ、なんのストレスもなく煙草の先が赤く灯る。

オトナの男って感じでかつこいいなオイ。

まあ、洗練度の差こそあれ、友人同士でもよくやる、なんてこと
のない礼儀のようなものだ。

「ども」

「……ここに住んでると忘れそうになるんだが、外にこんな樹はない。外から来た君には珍しく映るだろうね」

……俺が空から落ちてきたのを見てたのか？

さつき光っていたのも？

ちよつとはつきり言う俺が目撃していたら即マスコミ行きだ。痛む程度に拘束して宇宙人だ何だと囃し立てることだろう。

半分ほど燃えた煙草が灰になって落ちていく。

「おっと、脅かすつもりじゃないんだ。それ以上余計な動きをせずに、ただ僕と一緒に来てほしいだけさ」

にこやかに笑う男。

今日は色々よくわからない出来事に直面するが、これだけはわかる。

今、この男に逆らっちゃいけない、ってことだ。

01 胡蝶の夢とかそんな感じ

「フオフオ、つまり、えゝ、坂槻御門君じゃったかの？」
「はい」

「君はいつのまにか霊体のような状態になり、突然この街の上空に現れた、ということじゃな」

「僕が無理矢理理解できる範囲では、概ねそういうことです」
「ふむ」

俺は今、俺をやんわり脅迫してきた眼鏡男に連れられて学園長室とやらにいる。

そこにいたのは見事な白髪のカジイで、そのシルエツトはまるで洋梨のようだ。

部屋の名前と立ち位置からして、この老人が学園長なのだろう。

一応俺が不審者だというのはわかるので「すまないね」という言葉と共に装着された手錠のようなものについては言及しない。

しかしこうした扱いは公的権力を持つ組織だから許されているようなものではなかったか。

明らかに学校組織管理者としか思えないこのふたりは、俺を警察に突き出すでもなく尋問を始めたのだ。

まあ、抵抗して無駄な悪印象を与えるのも不利なのでおとなしく答えられることは答えたが、若干、越権行為ではなからうか、という疑念は燻っている。

あとついでに言わせて貰えば、この手錠のようなもの。

まるで浦。幽。にかけられてた呪霊錠みたいなんですけどどんな原理でできてんの？

「そっちはどうじゃ？」

パソコンを操作していた眼鏡男に確認する。

ラップトップを閉じて立ち上がり、ややずれた眼鏡を直しながら成果を報告した。

「彼の証言から照会してみました。青葉大学という施設は過去に遡っても存在していません。医療記録や公的機関のデータベースにも坂槻御門という人間は登録されていません」

……は？

そんなわけないだろう。

全国的に見れば地方大学のひとつだが、地元ではそれなりに名前の通った大学だぞ？

それになんだ、医療記録とか公的機関のデータベースなんかどうやって調べたんだ。

怖いから絶対聞かないが、それに俺が登録されてない？

いや、大学の存在は置いておくとしても、幼馴染が俺の存在を忘れていたってことはデータが消えていてもおかしくはない、か？

もうなにがなんだかわけわからん。

混乱している俺を余所に、ふたりはわざと聞こえるようにだろうか、大きめの声で密談を始めた。

矛盾してるのはわかってるから気にしないでほしい。

「高畑先生、どう思うかの」

「正直、にわかには信じられないことですね。しかし僕は世界樹の発光も確認しましたから、まるつきり嘘ではない、とは思ってます」

「そうじゃの。現実には結界は上空から高速でぶち抜いておるし、普通なら落ちる前に燃えカスになっていそうなもんじゃ。何らかの力が働いた、と考えるのが妥当じゃろうな」

「それと、これは僕の勘ですが……」

声は小さくなり、例え聴覚に意識を集中したとしても聞き取ることはできない、本物の密談に移ったようだ。

……さて、それよりもどうしたもんか。

なんか耳に覚えのある単語が飛び込んできたんだが。

高畑？

ナイスヒゲで眼鏡で笑顔の怖い高畑？

んで光る世界樹、結界とか耳慣れない不思議パワーで覆われた学園都市。

嫌にテンプレート染みた喋りをするヒゲチョンマゲ学園長。

うん。

俺はこの世界についてちょっとわかったことがあるんだが、舌嚙んでいいですか？

「坂槻君」

奥歯に舌を挟んだところで声をかけられた。

これはきつと夢だから、俺は早いところ現実に戻りたいんだが。

……まあ夢だとわかれば多少は気も落ち着くというものだ。

もう少しぐらいなら奇想天外な潜在意識に付き合ってもいいかもしれない。

「とりあえず、君は不法侵入者から観察対象へと格上げすることになった」

「それは……喜ぶのですか？」

「ははは、そうだね。現実的なことを言えば、君は調べた限りこの世界に存在していた人間ではないらしい。とすると身寄りもないし、当然住むところもお金もない。さすがにそれでは不便だろう？ だから衣食住は僕らが保障しよう。まあ、ちょっとした監視はあるし、

定期報告くらいはしてもらうことになるけどね」

夢から覚めればそんなことはどうでもいいんだけどな。

どうせなら他の登場人物にも会ってみたいけど、もう夜だからな、寝たらもう終わってしまうんじゃないのか。

都合よくポーンと場面飛んだりしないかね。

「……わかりました。お任せします」

「うん。じゃあ大学のほうに編入手続きをしておこう。それで構いませんね、学園長？」

「フオフオ、任せたことに口は挟まんよ」

どうやら俺の身柄は高畑先生に一任されたようだ。

腕を上げる、という仕種をされたのでそのとおりにすると、呪霊

錠（？）が小気味のいい音を残して弾け飛んだ。

コレってモロに魔法なんじゃないの？

いいのか、一般人の俺に見せて。

というか、任されたからって一介の中学教師が大学の編入どうたらってどうにかできるのか？

いや、別にできるならどうでもいいんだけど。

学園長も気持ちいいほどの丸投げっぷりですね。

様々な感想を浮かべつつ促されて部屋を出る。

「さて、部屋の準備には二、三日かかるだろうから、その間は宿直室を使うといい。幸い今は夏休みだからね、そう気兼ねすることなく使えるはずだよ」

夏休み？

それではメインキャラはほとんど魔法世界に行っているじゃないか！

なんだ、つまらん。

「そういえば、まだ自己紹介をしていなかったね。僕はタカミチ・T・高畑。こここの中等部で教師をしているんだ」

「坂槻御門です、よろしく」

「ああ、麻帆良学園都市へようこそ」

……さて。

夢の中とはいえ、せっかく「ネギま」の世界に紛れ込んだんだ。何か面白いことがあるばいいけどな。

02 教育実習生・坂槻御門

結論から言うと、寝ても覚めても俺は「ネギま」の世界から出ることはできなかったわけだ。

夏休み一ヶ月の間、じわじわと襲い来る混乱と絶望に苛まれていたわけだ。

少なくとも俺にとって、コレが現実なのだと納得したのは冬にさしかかるうかという時期だったわけだ。

もつとも、そう悪いことばかりではなかったけど。

どうやら俺は本編よりも前の時間に迷い込んだようだ。

具体的には二年前、主要メンバーたちは小学校六年生ということだ。

つまり物語はまだ水面下でしか動いておらず、うまくいけば同じ流れの中で物語を体験できるという、なかなかおいしいタイミングと言える。

それに気付く前は「なんでせつかくの異世界で除け者やねん！」
と思っていたので不幸中の幸いだ。

そしてこっちが重要なのだが、俺には結構な量の魔力が眠っているらしい。

わー、ベタだなー、とは思ったが、ないよりはあったほうがいい。
まだ何もできないんだけどな。

保護観察処分になったのもその辺りが関係しているとかなんとか潜在的な魔力があっても使えないなら脅威ではない、なら懐柔して手駒にしておもう、というわけだ。

俺の中で明確な方針が決まったのは立ち直ってしばらく後、年が明けてからだった。

都合よく俺の卒業を待つように物語が始まるので、教職を取つてなるべく近い位置から、あわよくば魔法先生として紛れ込むこと。ある程度の必修単位は取得済みだったので、教職課程をこなしながら空いた時間は鍛錬に注ぎ込むことができた。

俺はネギのように天才なわけではないから、この時間的猶予はありがたい。

というか魔法に関してならば普通以下である。

高畑先生曰く、「ちよつと不器用だけど、僕と似たタイプだね」とのことだが、純粹に魔力の行使ができないのだ。

体内には確実に存在するが、体外に放出することはできない。きつかけを掴めばもしかしたら、とは言われているが、現状では咸卦法にすら使えない。

今はただ己の肉体を鍛えるしかないのが、少し寂しい。

そんなスポ根染みた生活を続けて一年半。

季節は夏休み直後、ネギが赴任してくるおよそ半年前である。

「本当は同じ科目の先生がいいんだろうけどね」

「お世話になります、高畑先生」

「まあ君については心配してないよ。どちらかというと、君が実習するクラスのほうの問題かな」

「望むところですよ」

麻帆良学園本校女子中等部？ A。

問題児揃いと評判の難関クラスである。

俺はここでちよつと遅い教育実習をすることになった。

とはいえ、俺としては先に顔を把握できるし以降の手間を考えれ

ば、ここ以外は考えられない。

実はそれとなくここで実習できるように学園長に頼んでいたり。

「フオフオ、このクラスには孫がおるでの。どうじゃ、なかなか器量よしじゃぞ」

とか言ってたが、もしかして誰にでも言ってるのか、そんなこと。そういえばお見合いさせるのが趣味だったか？

かすかにざわめきが漏れてくる廊下。

高畑先生がドアの前で立ち止まる。

下げられたプレートには「? A」の文字。

「さあ、着いた。じゃあ気圧されないように頑張ってくれ」

そう言うつと何のためらいもなくドアを引く。
落ちる黒板消し。

瞬間に聞こえてきたからかうような悲鳴。

「おっと」

何事のなかったかのようにそれを受け止め、中に進む。

「あつ、ちよつと、高畑先生じゃない」

「あー、そりや実習生を先に入れるわけないかー」

「アンタらなにしてんのよ!」

ざわめき、静寂、ざわめき。

黒板消しトラップか、ネギもやられてたな。

恐ろしく定石どおりやってくるね、この娘らは。

「おいおい君たち、実習生の先生に当たったら大変じゃないか」

「……スミマセン」

「わ、私はやめろって言ったのに！」

さつきから一番うるさいのがアスナか。

本当に高畑先生のこと好きなんだなあ。

「はっはっは、まあ大事には至らなかったんだ。次からは気をつけてくれよ。じゃあ先生、どうぞ」

いつせいに視線が俺に突き刺さる。

おお、とか、へえ、とか七十四点、とか好き勝手な感想が耳に届く。

凄いな。

ネギのときと違って微妙な空気だ。

そして点数をつぶやいた奴、余計なお世話だ。

高畑先生の手招きに応じて教壇に上がる。

「これから三週間、体育祭までの期間実習することになった——」

「坂槻御門です。短い間ですが、皆さんに世界史を教えることになります。よろしく」

軽く一礼して顔を上げると、幾人かが何か引つかかっているような表情で隣同士確認しあったり、探るような目でこちらを凝視している。

こういう空気って気まずいから苦手なんだけどな。

すると何かに気付いたのか高畑先生がフォローのように俺の説明を加えた。

「坂槻先生は麻帆良大学の四年生で、文武両道、自ら立ち上げた統

合武術部の部長でもある。もしかしたら聞いたことのある人もいるかもしれないな」

「おおつ、聞いたことあるネ、麻帆大の紅竜王！ ムム、先生がそうだったとは、一度手合わせ願いたいヨ」

古菲、やたら好戦的なのは仕様だろうが、その強者を求める姿勢は先生好きだぞー。

もし戦ったら五分五分くらいかな？
というか。

「……何だ紅竜王って」

知らぬ間に恥ずかしい二つ名が付いてしまっていたらしい。

武術に関しては血の滲む鍛錬によって常人の域を脱却できたが、ガチの勝負では魔力を使えない俺は未だ高畑先生に敵わない！

究極技法って言うだけあるよ、咸卦法。

「拙者も耳にしたことがあるでござる。あまりの速度ゆえに繰り出す技が炎に包まれるという、正体不明の達人がいると」

時代がかった喋りに細目、楓か。

それはまさか部内でやったバーベキュー大会のときの醜態ではなかろうか。

思い出すのも苦々しいが、確かに俺の拳は燃えていた。

後輩のうっかりによって被った油に火が点いてな！

それが紅竜王の由来か、噂って怖い。

正体不明なのは、公式試合とか出てる暇があつたら鍛錬するわ！
とか言って逃げ回ってたからだろう。

「思い出しましたわ、坂槻御門先生。確か一年ほど前に実家のス力

ウディングレポートでお名前を拝見いたしました。何でも中世イングラント史に関する論文で特に洞察力に優れる、と絶賛されていましたわ」

無駄に優雅でちょっと変なお嬢様、雪広あやか、いいんちょね。

おお、なんかくるくる回ってる。

論文は魔法世界についてとかそういう関連を調べたついでに、当たり障りのない部分だけをまとめたものだったが、切り口が斬新だとかで学会で発表されたりもした。

もちろん学園長に問題ないか確認して、いくつか修正したうえで、だけどな。

余計なことを知ってるってのは、気を遣って面倒くさいもんだ。

お、いいんちょの話でコクコクと頷いてるのは、そうか、俺の論文読んだんだな。

口をバツテンにした哲学者の卵、綾瀬夕映。

なんとなく他の図書館組も俺のことは知っているらしい様子だ。

夕映の前、俺には全く興味を示さず高畑先生を凝視しているオツ

ドアイが神楽坂明日菜、最重要人物か。

その隣でほえほえしてるのが学院長の孫、近衛木乃香。
なるほど。

「はい質問！　まずひとつめは定番ね、先生は彼女とかいるんですかー？」

「ノーコメント、いないとだけ言っておこう」

「ちゃんと答えてるし！」

本気で興味があつて聞いているわけではないだろうが、まあ親睦を深めるためだ、尊厳に係わることもなければちゃんと答えてやるう。

でもなければこの狐目のパパラッチ、朝倉和美は地の果てまでも

追ってくるだろうから。

この後は朝倉の勢いに乗じてか、きゃあきゃあ言いながら質問タイムが始まった。

女子中学生って元気過ぎて怖いわー。

そうそう、みんな特徴的だから顔と名前の一致は余裕でした。

そんな中、ずっと奥の席から動かずに俺を観察していた鋭い瞳。

吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

彼女の瞳は、圧倒的な力量差とかそういう次元ではなしに、俺を落着かなくさせる何かを秘めていた。

03 図書館とその後

教育実習三日目、2 Aの授業中。

担当教師は高畑先生のまま、社会科教師の指導を受けるという回
りくどい実習を続けている。

多少面倒でも英語教師の資格を取るべきだったか？

でもそうすると高畑先生に源先生、来年にはネギも来るので英語
教師ばかりになってしまう。

というか俺が？ Aでやりたいと言ったからこんなねじれ実習
になってるんだよな。

今度からはもう少し考えて先のことを決めよう。

「……東洋と西洋では断続的な交流があつたものの、全く異なる精
神風土が構築されることになった。ではその最も顕著な例を考えて
みてほしいんだが、何か思いつくことはあるか？ 大河内」

「え？ えっと、アルファベット文化と漢字文化、とかでしょうか」

若干慌てて立ち上がり、目線をせわしなく彷徨わせて答える。

クラス内では平均程度だが、学年全体だと中の下、という微妙な
成績の大河内アキラ。

まあ水泳で超中学級の成績を残しているという事実を鑑みれば、
よく頑張っているほうだろう。

「違いという点では大きく間違いではないな。ただ、精神的な部分
で、という問題だとすると不正解だ。考え方はそれでいいぞ。そう
だな、ヒントは宗教に関係することだ。それを踏まえて、あゝ、超」
「いくつか正解の候補はあるが、恐らく先生の想定している正解は
「一神教と多神教ネ」

いくつかありますか、マジっすか。

さすが麻帆良の最強頭脳、超鈴音。

鍛錬バ力だった俺でもそのお噂はかねがね聞き及んでおりますのことよ。

うーん、学園祭とかで絡むんだよな。

もうちょっとこう、超にも救いのある終わりかたにしたいもんだが。

「正解だ、ヒントはいらなかったかな。特に差が大きくなるのはキリスト教が興り、土着の神々を従属神、あるいは悪神として取り込んでからだな。まあこのあたりは趣味の領域というか、雑学に近いから今は置いておこう。つまり神というものを崇拜する、という一点において同じであるのに、方や西洋は唯一神を、方や東洋は主神を含む雑多な神々を信仰する、という思想的には両極端な方向に進んでいったわけだ。ではそういう側面から歴史的な意味を考えていこうか」

担当教師にダメ出しをされました。

中学生に教えるレベルじゃなかったようです。

でもさ、いろんな側面から歴史を見るってのは大切なことなんだよ？

放課後。

業務を終え、噴水の広場でひとりくだを巻いていると、三人の生徒が俺に近付いてきた。

「坂槻先生、先ほどの授業のことで聞きたいことがあるのですが」

「なんだい？」

綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナ。

確かこの図書館組はネギにも質問に来ていたな。

でもその時は宮崎がネギに対してアプローチする手段でしかなく、
つたはずだ。

ま、まさか？

……いやいや、いくら俺でも今はそういう雰囲気じゃないことぐ
らいわかるけど。

「私にとって先生の着眼点は非常に革新的でした。差し支えなければ
もう少しお話を聞きたいのですが」

どうやらメインで興味を持っているのは綾瀬らしい。

ちよつと突っ込んだ話で好奇心に火が点いたのだろうか。

「俺は構わないよ。じゃあここではなんだし、どこか……」

「では図書館に行きましょう。集団学習用の個室があります」

途中で合流した近衛も連れて、図書館探検部勢揃い。

学習室では、いくつかの神話伝承を歴史に関連付けるといふ、真
つ当な教師ならばやらない方法で彼女らの興味を惹きつけることに
成功した。

理系の教科はともかく、文系の勉強というのは興味を持たなければ
学ぶ意味はない。

暗記し、効率よく運用するだけで実利を伴う数学などとは根源か
らして違うのだから。

まあ本当はどちらであつても、真の理解を得るためには興味を持つて臨まなくてはならないし、単にテストの点を取るだけならそんなことをする必要はないのだが。

幸い今回はわずかでも興味を持つて話を聞きに来てくれたわけで、どうやらその関心を伸ばすことができたのは教師見習いとしては満足していい結果だと思う。

……こんなところで言うことではないが、日本の教育システムは生徒から興味を削ぎ落とすことに情熱を傾けているのではないかと感じるほど素っ気ない。

もう少しやりようがあると思っただけだな。

ある程度の話を終えると、結構な時間になっていた。
神楽坂が近衛を迎えに来たこともあり、そこで課外授業はお開きということになった。

「それにしても先生、先生は普段「俺」なんですね？」

俺は大学の、彼女たちは女子中学の学生寮へ帰るため、駅を目指して歩いている。

そんな中で同級生をまんべんなくいじっていた早乙女が急に俺へと振ってきた。

「ああ……変か？ 高畑先生が「僕」だったから仕事ではそうしようかな、と」

「いえ、ただ、あまりに「僕」が似合つてなかったので普段どおりのほうがいいと思うです」

「高畑先生を真似しようなんて十年早いですよ！ そりゃあ憧れる

のはわからないでもないけど、そもそもオトナの魅力ってものが……」

そういえば厳密な意味で仕事じゃないから、と話し方まで気にしてなかったな。

早乙女に代わって答える綾瀬だったが……そういうことはもう少しオブラートに包むと俺が喜ぶぞ？

離れていたはずの神楽坂も天性の地獄耳を発揮してつらつらと文句を垂れ流しているが、ここまで来るともはや憧憬を通り越して崇拜だな。

それにしても俺が高畑先生を模倣するのは最も近い存在なのだから仕方ないって、何故思いつかないんだろう？

……ん？

もしかして。

「あー、神楽坂？」

「なんですか」

「もしかして高畑先生から聞いてないのか？」

「なにをですか？」

「俺の保護者も高畑先生、無理矢理言ってみれば俺たちは義理の兄妹みたいなもんなんだけど」

「……は？」

「え」

「……」

「あやー」

「ほほう？」

呆ける神楽坂以外は各自興味の差こそあれ、俺と神楽坂を見比べる。

この様子では知らされてなかったみたいだな。

まあ高畑先生はわざわざ教えることでもないと判断したんだろう。実際どうでもいいっちゃいいことだし。

神楽坂は口をパクパクさせて俺を指差したまま固まっていたかと思つと、肺活量の限りを尽くして驚きを表現した。

「ええええええー！！！」

月夜を切り裂くような叫びは、学園長室にも届いたとか何とか。

放心状態の神楽坂を近衛たちに任せた俺は、気になることを思い出して来た道に戻っていた。

先週、ネギの赴任が決まった、と高畑先生から聞かされた。

ネギ・スプリングフィールド。

サウザンドマスターの息子にして、本人も「偉大なる魔法使い」の可能性を秘めた天才少年。

しかし血統的、能力的に超エリートであっても、どうしてもまだ子供、未熟な点をフォロースする人間が必要になる。

高畑先生曰く、俺にその役目を任せたい、ということだった。

自分はこれから海外出張などが増えるから、代理として見守ってくれないか、と。

最も年齢の近い俺ならネギもやりやすいだろう、という思惑もあるに違いない。

俺としては願ってもない、頼んでも引き受けない役目だ。

是非もなく了承した。

先々のことを考えれば、これからネギに立ちはだかるだろう障害を取り除くことは避けねばならない。

その中で彼は心技体全てを成長させていくのだから。

ただ、それには大きく関与しない、後でいくらかでも修正しようのある事件は防いでおいて構わないだろう。

早足のまま校舎前を抜け、噴水広場を横目に、目的の場所に辿り着く。

桜通り。

満月の今日、目的の人物はそこにいるはずだった——いた。

街灯の上に立ち、満月の光を背負った、はためく黒いシルエット。煙草に火を点けながら無造作に近寄り、教師として意識しながら語りかける。

「こんな時間に外出というのはあまり感心しないな、マクダウェル」

月の光を吸い込んだような金色の髪が慣れと共に浮かび上がり、俺の言葉によってわずかな動揺の気配を見せた。

しかし次の瞬間に揺らぎは消え去る。

同時に警戒の気配が周囲に漂い、その瞬間の短さから尋常ではない精神力を持つことが窺える。

さすが、伊達に六百年生きてないか。

「ほう……何故気付いた？」

「呪いを解くためとはいえ、少しやり方が稚拙じゃないか？」闇

の福音」「

正体も目的も知っているぞ――。

それを知らせると警戒は振り切れ、深淵の闇を溶かし込んだような瞳が妖しく笑いの形に歪む。

「そこまで知っているなら話は早い。何故知っているかは、血を吸っている間にも聞かせてもらおう」

04 秘められしチカラの一端（前書き）

Side-Evangelineで御贈りします。

04 秘められしチカラの一端

「そこまで知っているなら話は早い。何故知っているかは、血を吸っている間にでも聞かせてもらおう」

確か教育実習で来ていたサカツキとか言ったか。

私のことを知っているということは、新たな魔法先生候補、というわけだな。

ふん、ジジイもご苦労なことだ。

それにしても独自の情報網で仕入れた情報に、今日から動くと決めたのはつい二日前のことだ。

こちらの動きが読まれていたとも思えんし、いったいどうやってここに辿り着けたのか？

まあいい、それは言ったとおり、ゆっくり聞かせてもらうとしよう。

「……そう、そこだ」

「なに？」

「血……魔力は俺が提供してやる。だから一般の生徒を襲うのは止せ」

「フ、フハハハ！ 面白いことを言う奴だ。貴様の血は貰ってやる。だが、従わねばならぬ道理など一片もないわ」

この私を、悪の魔法使いを相手に交換条件とはな。

思わず笑いがこみ上げてきたではないか。

いいぞ、昨今のくだらんエンターテインメントとやらよりも楽しませてくれそうだ。

「何もネギ・スプリングフィールドに手を出すな、と言ってるわけじゃない。もつと穏便な方向で準備するほうが危険は少ないはずだ。学園上層部に知られたらマズいんじゃないのか？」

「む……」

単独行動だと？

いくつかの保険くらいはかけていようが、本気で独断だとすればあまりにも頭が悪すぎる。

最弱状態とはいえ今夜は満月、多少腕に覚えのある程度の魔法使いならば八つ裂きにすることも、記憶を消して予定通りことを進めることもできるが……。

「貴様、上に逆らうつもりか」

「違うよ。今の俺は教師だ。見習いだけどね。教師が生徒を守る、当たり前のことだろう？」

「……………」

「考えてもらえるかな」

確かにわずかでもリスクを抑えられるのは魅力的だ。

それにタカミチとジジイ以外は私を危険分子扱いしているからな、“敵”内部に協力者を持つておくのも悪くない。

いざとなれば吸血の副産物によって操ってしまえばいい。

……いいだろう、私にメリットしかないのは気になるが、向こうは生徒の安全を血で購うのだ。

もとより私に不利な条件であるはずがないか。

「問題がある。貴様の魔力で足りるならそれで手を打ってやらんでもないが、足りなければ他を当たらねばならん」

「自信はないけど、多分大丈夫」

曖昧な答えだが……まあ時間もある、普通の魔法使い程度にあれば問題なからう。

街頭を蹴り、男の目前に着地する。

「まあ、吸ってみればわかることか。……本当にいいんだな？」

「死なない程度で頼むよ」

「ふん、気が向いたらな」

身振りでしゃがませ、無造作にネクタイを引き抜いて肩口を開く。ふふ、なんだ、膝について頭を垂れるなど、王に忠誠を誓う騎士のようだな？

本来喫煙者の血は不味いから飲みたくはないんだが、背に腹はかえられん。

鍛えられ張り詰められた首筋に、細い牙を突き立てた。

「……………!!」

なんだ、この血は！

美味い不味いの問題ではない。

なんだ、この溢れるような魔力は！

この血に魔力が内包されているのかとも思ったが、そうではない。確かにそこらの魔法使いよりも高い純度ではある。

しかし、そういった類の感覚とは違う。

この魔力は私のものだ。

「……ちょ、ちょっとマクダウエルさん？　そろそろ意識とかヤバいんですが……」

うるさい小僧だ。

ちっ、名残惜しいが、今吸い尽くしてしまうわけにもいかなくなっとな。

一滴も零さぬように、舐め取るように牙を離す。

「……貴様、いったい何者だ？　この血は、貴様の魔力は何かがかしい」

「し、死ぬかと思った……。おかしいって言われてもね、魔力はあるけど使えない、ぐらいしか」

「使えない？　タカミチと同じか」

「いや、俺は「高畑先生みたいに使う」ことすらできないんだ」

血を吸ってわかったが、こいつの魔力量は私やアイツなども遠く及ばないほどの容量を持っている。

扱いに不慣れなのか単にバ力なのか、表面化している魔力はまさに冰山の一角、しかもどれほどの大きさなのか正確な全体像すらわからない。

おそらくは「使えない」ことで無意識に封印されているようなものか。

しかも強大なだけではない。

こいつの魔力は端的に表現するならば「触媒」だ。

私だけに限ったことか、他の者にも作用するのはわからないが、他者の魔力を爆発的に増幅することができるようだ。

現に今、私の魔力は全盛期とはいかぬものの八割方戻っている。

これをつまく利用できれば、春まで待たずとも呪いを解くことは可能、か？

少なくともコレをジジいどもに利用されるのは厄介だな。

「……まあいい、とりあえず貴様の血で間に合うことはわかった。ひとまずついて来い、詳しい話をするぞ」

「それはよかつ、た？」

立ち上がるうとした男はフラフラと地面に突っ伏した。

そういえばそうだ、一リットル近く血を失っているんだったか。それでは眩暈で歩けるはずもないな。

放っておいてもいいが、しかしこのまま死なれては好機を棒に振ることになる。

ウチに運べば茶々丸が何とかするだろうが……。

「おお？ 世界が、回って、いる……！」

「……話は無理そうだな。日を改めるとしよう」

「そう、してもらえると、助かる。でも、今、助け」

茶々丸に介抱させるのは何故かわからんが癪だ。

運ぶのも面倒だし、適当な人間に拾わせるか。

ふむ、確かこいつに興味を持っていた奴がいたな。

「……フフフ、喜べ、誰か助けに来るよう手配してやろう」

05 アンプリファイア

散々な目に遭った。
いや、遭っている。

どうにか生徒に及ぶ被害を食い止めることは成功したが、予想以上に血を吸われて失血死寸前、ただ立つことも困難な状態に追い込まれてしまったのだ。

悪の魔法使いとは自称してもそこは根はいい人なはずのマクダウエル、せいぜい献血で採られるくらいしか吸われないだろうと思っていたのが甘かった。

そういえば俺は大人の男、殺しても主義に反しないのでしたね。

幸い、俺の魔力だけでもなんとかなると踏んだらしい彼女は、掌を返して止めを刺すことなく引き上げていったものの、最後に聞こえた言葉によって若干身の危険を感じざるをえなかったわけ。

案の定、俺の目前に現れた人物は想像しうる範囲で厄介な人ランキングの上位者であった。

「ムム、坂槻先生、こんなところで寝てなにしてるアルか？」

「古も、こんな時間、に出歩くのは、好ましくない、な」

「ナハハ、修行してたらいつの間にか暗くなてたアルよ」

「……勉強も、そのぐらい、打ち込めば、なあ」

「それは言わない約束ネ。しかし妙に気になって来てみれば、先生が寝ているというのは予想外アルよ」

マクダウエルが無意識操作でもしたのだろうか。

そんなことができたような記憶はないが、認識障害やらの感覚操作は魔法使いの基礎でもある、使えても不思議ではない。

それにしてもよりにもよって古菲とは、何やら面倒なことになりそう。

いろんな意味で。

しかし現状では文句も言っていられない。

「あー、ちょ、っと貧血でね、手を貸してもらえ、ないか」

「意外とだらしのないアルね、紅竜王」

「……面目ない」

まともに歩けない俺は肩を貸してもらうつもりだったわけだが、手っ取り早いという理由で背負われてしまった。

こちらら成人男性、鍛えてる分一般人よりは密度の高い体であるが、古は苦もなく二駅分を駆け抜けた。

これも修行のついでだ、と言うがなかなかできるものじゃない。果たして俺は己の倍ほどもある人間を背負ってここまで走れるだろうか。

……うーん、できなくはないけど、積極的にやりたくはない、かな。

一年やそこらでは、まだ基礎体力で及ばないか。

ちなみに、いわゆるお姫様抱っこは全力で辞退させていただいた。

「大学の寮でここでよかたアルか？」

「ああ、ありがとう。このお礼は必ずさせてもらうつよ」

「では貸しひとつ、返済方法は手合わせ以外認めないアル」

「……仕方ないな」

気をつけて帰れよ、という俺の言葉に笑いながら手を振り、あっという間に見えなくなった。

走り込みの量増やすか……。

しかし困ったな、古との仕合いは短期決戦に持ち込めばなんとかなるにしても、マクダウエルの家知らないんだが。

学校関係者に聞くのはちょっと避けたいし、校内で直接話しかけ

るものだろう。

それらは最後の手段として、何か考えないとな。

翌日の放課後。

職員室を出たところで視界が暗くなり、誰かに担がれて運ばれた。ズタ袋に詰め込んで誘拐なんて、また原始的な。

しばらくすると袋を外され、目の前には尊大に足を組んで鎮座まします金髪的美少女が現れた。

「……マクダウエル、授業には出よう」

「学校には行っていたんだ、構わんだろう。予想していたのか？
驚かないな」

そりゃあ俺を拉致しようなんて考えるのは今のところ貴女様ぐらいしかありませんもの。

ついでに運び屋さん、気持ち硬かったから茶々丸だろう。

「俺もどうやってここに来ようか考えてたから手間が省けたよ」

「ほう、殊勝だな。約定を違えぬというのはいい心がけだ。さて」

茶々丸がトレイにボトルやらグラスやら一式を載せて部屋に入り、恭しく赤い液体を注いで主人に勧める。

次いで俺に。

「坂槻先生もどうぞ」

「ありがとう」

はあ、機械にこんな動きができるとはね。

魔法と科学の合体つてのは、結構興味があるな。

マクダウエルは注がれたワインの香気に目を細める。

「どうやら茶々丸のことも知っているようだな。まあ知っていてもおかしくないことは後回しだ、本題に入ろう。貴様の魔力についてだ」

「昨夜も言っただけど、俺には何もわからない。魔法を使えないんだから、当然なんだけどな」

「それも気になるが、本質はそこじゃあない。私は貴様の血を吸ったが、それが普通ではなかったのだ」

「……よくわからないが」

「面倒だが説明してやる。普通、私が血を吸うとその分だけ含まれていた魔力をプラスできる。これは簡単な足し算で、未だかつて覆ったことのない大原則だ。もちろん多く吸えばその分だけ魔力が増える。ついでに言えば血の量イコール魔力の総量と思って差し支えない。例えば半分の血を吸えばその人間の魔力の半分が私にプラスされるわけだ。まあ、半分も吸ったら間違いなく死んでしまうがな」

頷く。

グラスを置いたマクダウエルは脚を組み替えて続ける。

「ところが昨日、貴様の血は私の魔力に反応し、触媒となって自身の魔力を爆発的に高めたのだ。これは全く想定外の、これまでの大原則を覆す掛け算だった。しかしその効果は思った以上に短い。まだ丸一日も経っていないというのに、もはや私の魔力は通常時とさして変わらん」

……つまり俺の魔力は、他人の魔力に作用する増幅器アンプリファイアのようなものだ、ということか？

仮にそうであるとなると、俺自身が使えない、ということにも一応の説明がつく。

いくら容量がデカかろうと、増幅器は単体では意味を成さない。

「とすると俺の血の使い方は、小分けにして随時使用、というのが効率的だな」

「そういうわけだ。全部吸い尽くしてもすぐ元に戻るのでは意味がないからな。……その力、他に誰も知らんだろうな？」

「……もしかしたら学園長なんかは気付いてるかもしれないけど、俺が知らなかったんだし、確証までは持てないんじゃないか？」

「ふん、曖昧だな。この効果が私だけに発現するのならば問題ないが、他の魔法使いにも同様の効果が出るとしたら、貴様は生涯実験動物扱いだぞ」

「うえっ？」

それは嫌だ！

異世界に来たら実験動物なんてどこのSFだよ！

「そんなにヤバい力なのか？」

「ハッハッハ、それはそうだ、アーティファクトでもないのにここまで強力な利用価値があれば、そこらの稀少技能など研究するまでもないわ」

マジかー！

もしかして俺史上最大のピンチ？

逃げようにも俺の経済力やら戦闘力なんてタカが知れてるし、このままではバレるのも時間の問題だろう？

「まあ、私以外にも効果があるのか、それは今のところわからん。触媒となるのが魔力なのか血液そのものなのかもわからんしな。だ

が少なくとも私にとって貴様は、これ以上なく重要な価値を持つ人物というわけだ。もし何か困ったことがあれば相談に乗るくらいはしてやるう」

おお？ それは破格の条件だ。

それほどの価値が俺にはある、ということか。

万が一研究所送りにされそうになったりしたら脱兎のごとく駆け込もう。

「わかった。とりあえず俺の力のことは秘密に、適当な間隔で血を提供する、ということでもいいか」

「それでいい。血は茶々丸に採取させるから、極力私には構うな。どこで露見するかわからんからな、接点は少ないほうがいい。用があれば茶々丸を通して連絡することにしよう」

その後もいくつかの決め事を作り、さて帰ろうかというところで再び袋詰めにされた。

流れていくと、以下のとおり。

「じゃあ帰ろうかな」と腰を上げる俺。

「茶々丸」指を鳴らすマクダウエル。

「ハイ、マスター」構える茶々丸。

周到にも程があるが、場所がわからないと俺が緊急のとき駆け込めないじゃないか。

しばしの暗闇が明けると既に俺の部屋だった。

茶々丸はもういないし、鍵をかけてたはずの部屋にいるし、なんか俺が知ってる茶々丸よりも無駄なスペックが高い気がするんだが気のせいだろうか。

ああ、俺は昨日から何度女の子に運ばれているのだろう。

06 麻帆良最強決定戦（仮）

「よし、やるかぁー！」

日曜日の早朝、トレーニングウェアを身につけた俺は、自分でも意外なほどにノリノリであった。

何かいいことがあったのか？

そう問われれば、どちらかといえば「否」と答えるだろう。

それはそうだ、秘めた魔力資質が稀少価値を持ち、ともすれば実験動物として余生を過ごさなければならぬ可能性がある、と知ったばかりだ。

例えば「あなたは特殊だから薬漬けにして二十四時間三百六十五日命尽きるまで観察したり解剖したり実験したりしますよ」と言われて嬉しい奴はいないだろう。

もちろん俺も全身全霊でもって遠慮したい。

では何故ここまで陽気に振舞っているのか？

実際俺も驚いているが、決してこれはカラ元気や痩せ我慢といった積極的な逃避の類ではない。

もしかしたら要素のひとつにはなっているかもしれないが、意識は全く別のところに向いていた。

俺は、楽しみで仕方なかった。

バレれば監禁、というリスクは確かにあったが、今まで一年間折を見て試し、その都度残念な結果に終わっていた魔法行使がもしかしたらできるかもしれない、というのがひとつ。

仮説として、使えなかったのは自分の魔力性質を理解していなかったからだ、というのは非常に魅力的なものに思えた。

希望的観測とわかつてはいるが、各種強化系の魔法などは相性が

いいのではないだろうか、などと日夜妄想に耽って現在に至る。

もうひとつは隣で準備運動に余念がない、武術少女の存在だった。現時点では両者共に魔法が使えず、気の扱いも初心者レベル。体力、技術で古菲に一日の長があるものの、攻撃力、防御力は体のつくりからして俺が有利。

総合してほぼ互角という、最近絶えて久しい同等の人間との仕合に向けて熱が入っていた。

……一般人では相手にならないし、高畑先生相手ではまだ「お稽古」だからな。

「ウム、私の準備も完了アル」

最大の障害と思われたマクダウェルとの密約を纏め、次に行うのは借りを返すこと。

金曜日の放課後に約束を取り付けると、古は嬉々として走り去ってゆくのだった。

これでひととおり懸案事項は片付いた、と思ったのだが。

「くーふえがんばれー！」

「先生が相手だからって手加減するなよー！」

「今年のウルティマホラ優勝者と麻帆大の紅竜王の仕合かー、これお金取れるよ？」

「えー、肉まんに小籠包、朝食代わりの飲茶セットはいかがか」

「じゃあ私は坂槻先生に食券十枚！」

見事なまでに見世物になっていた。

まあ魔法使うわけじゃないからいいんだけどな、でもこれはこれで新たな懸案事項のような気もする。

あんまり噂になるようなことしたくないんだけどな。

「オホン、では私、報道部の朝倉和美が審判兼司会実況を担当させていただきます」

「……あまり大袈裟に書かないでくれよ……」

「センセ、私は真実の僕であるからして、起こったことは仔細漏らさず記事にする所存なのです」

「脚色は控えめにな」

場所は奇しくもネギがマクダウエルの弟子入り試験で茶々丸と仕合うはずの世界樹広場前大階段。

ほとんど全員が集まった？ A生徒たちは段上で姦しく観戦となつた。

中央の踊り場で、俺と古菲は相對する。

「稽古じゃなく仕合つてことでいいんだな」

「そうでなければ意味がないアル」

「わかった。お互い全力でやろう」

軽く右足を引き、腰を落として半身に構える古。
対して俺は右を前に、やや前傾で重心を下げる。

「……見たことない構えアルね」

「そうかもしれないな」

何せ俺のスタイルは完璧な我流なのだから。

設立した統合武術部——それはありとあらゆる武術、格闘術を研究し、新たな体系として一本に統合することを目的としている。

そのスタイルは武器だろうが何だろうが「なんでもあり」、古今東西はおろか隠匿されているもの架空のもの、一切を問わず詰め込み煮詰め、異種間の技の連携や効率化、果ては複合、融合などそれ

それぞれの使い手からすると外道、外法にしか思えないだろう域にまで及ぶ。

とはいえ、今日は純粹に無手での格闘勝負。

正攻法がどこまで通用するのか、これから何を鍛えればいいのか、そういったことを確認する意味でもいい機会になるだろう。

「では……はじめ！」

開始の声と同時に動いたのは俺だけだった。
五メートルの間合いを一息に潰し、手刀でもって居合い抜きを叩きつける。

この際鞘代わりになるのは左手だ。
古は体を反らせ、バック転の要領で後ろに回避するが、それも予想の範囲内。

前進と攻撃の勢いに任せ、後ろ回し蹴り。
さらに下がる古に追撃をかける。

振り抜いた右足は接地した瞬間に再び跳ね上げ、胴回し回転蹴り、裏拳、回し蹴り。

突きや前蹴りなどの流れを切ってしまう攻撃を一切排除し、さながら局地的な暴風と化して古を攻め立てる。

しかしながら相手もさるもの、全ての攻撃を躲し、冷静に反撃の糸口を探しているようだ。

ならば。

今までは回転系の攻撃主体で真正面から打ち付けていたが、目に慣れない動きで活路を開こう。

横に大きく跳び古の視界範囲から脱出、即座に最短距離で拳打を撃ち込む。

まだ古はこちらを認識できていない。
いけるか？

——止められた。

「止められるとは思わなかったな」

体格差を考えると、ガードされても吹き飛ばせるかと思ったんだが。

「危なかつたアルよ。もう少し踏み込みが強ければ間に合わなかつたハズ」

「まだ詰めが甘いか」

牽制しながら距離を開ける。

うむ、あれは硬気功というやつだな。

さすが中国四千年、易々と新興勢力に膝を折ることはないというわけか。

中国武術も齧ってはいるが、ここまでの使い手とやりあったことはない。

「……はつ。つい見入ってしまいました！ 坂槻選手の目にも留まらぬ連続攻撃、その間実にたった十数秒！ いったい何度攻撃したのか、私にはわかりませんでした！ ですが古選手には見えていた！ 全ての攻撃を捌き切ったのです！ 両者ともちょっとナメててすみませんでした！」

「おおおおお凄えええ！」

「え？ 何？ 今何が起きたの？」

「……これは……」

「大人気ないぞ坂槻ー！」

「さあさあまだ賭け食券受け付けてるよー！」

「朝倉ノリノリね……」

ギャラリーも盛り上がっているな………というか盛り上がりすぎだろっ。

祭り好きは結構なことだが、節度は守ってくれよ？

わずかに呆れの溜息を漏らし、目の前の相手に集中しなোস。

「今度はこちらから行くアルよ」

「いつでも」

そう言つと古の体がブレた。

ゆらゆらと、実体を持たない蜃気楼のような動きでいつの間にか目の前に迫つてきていた。

突き出される左肘をとつさに防ぐ。

その肘が支点になつた打ち下ろしの拳を受け流す。

さらに踏み込まれて顎を狙つた掌底、それを目眩ましに視界から消える脚払い、バランスを崩した俺に向けて跳ね上げる蹴り。

ほとんどを躲した古に対して俺は全てをガードさせられていた。

技そのものは知つていても、技量の優れたものが使うとまるで違う、という実例を嫌というほど思い知らされた。

初動を感じさせることなく繰り出される攻撃は、傍目にはゆつくりとした動作に見えて、一種の魔法のように突然俺に襲い掛かる。

俺が「連続で攻撃することを前提とした攻撃」であるとするならば、古のそれは「個の攻撃を突き詰めて結果的に繋がる攻撃」と言えるだろう。

どちらが優れているかは考えるまでもない。

ちよつとこれ以上捌き切るのは難しいな。

喰らうのを覚悟で反撃に出るしかないか？

わざと隙を作り、そこに大技が来たのを狙つて掴み、体格を利し

て投げから極めまで持つていく——！

「……はずだったんだが」
「それはすまなかつたアル」

わざと隙を作り、大技を出させるところまではよかった。

だが、古の繰り出した大技は投げ技だったわけ。

俺は何が起きたかもわからないまま地面に投げ出されていたわけ
で。

首に膝を乗せられ負けが決まったわけで。

「決まり手は一瞬の隙を突いた『なんだかよくわからない投げ技』
！ 古菲選手の見事な勝利です！ とはいえ負けた坂槻選手も噂ど
おりの実力者でした！ どうでしたか、解説の雪広さん？」

「いつの間にわたくしが解説になったんですの？ まあわたくしが
適任というのはわからないでもないですが、事前に許可を取ってお
いてほしかったですわね」

「そうですね、ありがとうございます。以上、解説の雪広さんでし
た！」

「ちよつと、朝倉さん？」

「本日は世紀の一戦、ウルティマホラチャンピオン対麻帆大の紅竜
王の仕合をお送りしました！ これからもイベントの実況には麻帆
良学園報道部をどうぞご贔屓に！」

「なんですのー？」

決着がついたかと思うとひとしきり囲まれ、なんだかんだと当た
り障りない返事を返していると、あとは熱気が冷めていくように徐

々に人垣がまばらになっていく。

思ってたよりも凄かった、だの賭けの負け分を補填しろ、だの好き勝手言われたが、先日の点数を呟いた不届き者は柿崎であることが判明した。

プラス十点らしい。

ありがとう。

しかし何だ、勝手に損したくせに昼メシを奢れと恫喝されるのは割に合わないというか踏んだり蹴ったりというか死者に鞭打つというか、かわいそうだとは思わんのかね、鳴滝（姉）よ。

そして悪いと思ってるならもっとしつかり止める鳴滝（妹）。

まあそういう交流もアリか、と安易に承諾したのがいけなかった。数時間後、またもやほぼ全員が集合して何が行われたのかは、俺の色々な事情によって割愛させてもらう。

落ち着いたところで古との会話。

「楽しかったアルよ、坂槻先生」

「ああ、俺もいい刺激になったよ、ありがとう」

「ウム……気になっていたのだが、ときどき技が拙かたのは私のスタイルに合わせたからアルか」

どことなくすまなそうな雰囲気と、隠し切れない憤りを秘めた問い。

慣れぬ闘い方になって事実上手加減されたのではないか、と思いつ込み、武道家としての誇りに障ったのかもしれない。

「あーいや、なんというか、申し訳ないがあれが俺の実力だ。確かに武器を使った技が多いけど、それはいかなる場所、状態でも力を揮えるようにって選択肢だ。古だって武器術は使えるだろう？ それと同じ、ただ俺の鍛錬が足りなかったただだよ」

「しかし……」

「こんな言い方はしたくないけど、拙いのは当たり前なんだ。そりや死に物狂いで鍛錬に打ち込んだけど、それだけじゃ昇華できないのも古ならわかるよな。……俺はまだ格闘技始めて一年しか経ってないんだから」

「なんと？」

「でももう少しぐらいいいところまでイケてると思ってたんだけどなー」

「イヤイヤ、十分アルよ！ 最後の投げは奥義のひとつアルよ？ そこまで使わせたのは先生が始めてだたアル！」

納得いかないようだったからあまり知られたくない情報まで開示したのだが、今度はもの凄い勢いで驚愕された。
まあちよつと落ち着け。

「ム……しかし天才というものはそういうものアルか。私は生まれたときから研鑽を積んでいるというのに不公平アルね」

待て待て待て。

誰が天才だつて？

俺が天才だったら後から来るネギをなんて形容するつもりだ。もしかしたら俺にはそういう才能がちよつとばかりあったかもしれないが、万事それだけで片付くようなものではない。

そんなに落ち込まれてもどうしたらいいかわからんぞ。

ん、俺の才能を否定すると古も否定することになるのか？

なら目先を変えて煙に巻いてしまおう、教育者ばく。

「……才能なんてものは、ないよりあったほうがマシ、くらいに思っておけ。自分より才能のあるものが現れたらそこで今までの努力を放棄するのか？ 違うだろう。他人から見ても素晴らしい才能なんて言われてるものは、本人が膨大な努力によって手に入れたもので

あることは少なくない。それを才能の一言で片付けてしまうのは努力した者への冒瀆だと思わないか？」

「……確かにそうアルね。私も、私が生まれる前から努力していた者たちを差し置いて奥義を継承した。それでも彼らに努力で劣っていたとは思わないアルよ」

顔を上げ、力強い光を湛えた瞳をどこか遠くへ向ける。

うん、よし。

才能だ何だともてはやすのは簡単だ、しかし真の才能とは努力を続けることなのだ、と誰かが言っていたぞ。

我が生徒（仮）よ、臆さず進むのだ！

「ウム！ ではまた来週、この時間に！ 再見！」

……あれ？

もしかしくとも再戦フラグですか？

06 麻帆良最強決定戦（仮）（後書き）

間が空いてしまい申し訳ありません。

新年会だったり風邪をひいてしまったりで時間が取れなかったのもありますが、やはりどうにもバトルというものは難しいのでした。ちょこつと齧ったことがあるとはいえ、超人的な彼らの動き、とても想像できるものではありません。

そこは頑張って妄想しましたが、うまく伝わっていればいいなあ、と思います。

07 いくつかの前触れ

今現在、俺の立場は非常に微妙だったりする。

表向きはタカミチ・Ｔ・高畑を保護者とする大学生。

しかしその実態は保護という名目の監視と軟禁、他の魔法生徒のように裏側の仕事などには一切関わっていない。

ただ、監視とはいっても俺の存在自体が極一部にしか知らされていないということもあり四六時中というわけではないし、軟禁にしても学園都市部から出るには許可が必要、という程度のものだ。

最初からそうだったわけではないが、まあ、おとなしくしていた甲斐があった、としておこう。

仕事が充てられないのは単純に戦力不足ということもあるが、心底信用されているわけでもないからだ、と思っている。

現に俺は要注意人物と密約を交わす仲であるし、原作知識を持っていながらそれを公表していない。

そのあたりは、結局原作通りにやるのがベターであると判断しているからなのだが、学園側に見れば利敵行為だのなんだのと、真実を知れば突っ込みどころ満載なのである。

あまり積極的に介入するわけにもいかず、しかし公的立場としては不審に思われない程度に行動しなくてはならない。

ところが厄介事つてのはこちらの都合に構わず発生するもので。

ああ、いや、都合の悪い出来事だから厄介事なんだったな。

「体育祭で？」 Aを可能な限り上位に導くこと」

それが教育実習最後の仕事であり、同時に俺の採用試験でもある。ネギへの学力向上指令よりはいくらか楽そうにも聞こえるが、「可能な限り」って一文がジジイの性格の悪さを現している。

仮に普通の学校単位で行われる体育祭なら、麻帆良学園本校女子中等部の中で優勝を目指せばいいだけであり、生徒の能力を考えればそれ自体は大した問題でもない。

だが、この学園都市に於ける体育祭とは、春の文化祭と並んで大きなイベントだったりするから性質が悪いのだ。

溜息を漏らしながら体育祭についてまとめられた書類をつまみ上げる。

——麻帆良学園都市合同体育祭概要——

- ・既定されているクラスを一集団とし、任意の集団間での勝敗の結果を総計して順位を決定する。（大学部の編成については別紙

4、f 参照）

- ・同じ組み合わせの対戦は何度行っても構わないが、集計されるのは一度目の結果のみとする。

- ・対戦する競技は各自協議の上決定のこと。ただし三名以上のチーム・団体戦が可能な競技のみとし、個人競技の対戦は認めない。

- ・対戦は担当教師または体育祭実行委員による立会いがある場合のみ認可する。未認可対戦は結果に反映しない。

- ・得点は加算方式とする。仮に負けても減算は行わない。

- ・得点は対戦する学年によって増減する。（例・同学年対戦の勝ち点は二、中学一年が高校一年に勝利した場合勝ち点五、下の学年に勝利した場合どれだけ離れていても勝ち点一。大学生は別紙4、fの規定により学年問わず「大学生」という枠で処理する）

- ・集計期間は三日間、各午前九時から午後五時の間とし、それ以外の時間で行われた結果は反映しない。午後五時前に対戦を開始したものは対戦終了まで期間を延長する。ただし最終日に限り午後五時時点で集計を終了し、当該対戦は無効とする。

- ・集計期間終了時、集団の各メンバーは最低でも一度は出場していないとはならない。未出場メンバーがいた場合、その集団は失格と

する。

・担任教師、或いはそれに準じる監督者は一度に限り参戦することができる。

・以下諸注意……

……簡単に言えば学園都市全体でバトルロイヤルオリンピックを開催するわけだ。

クラスの総意があれば不参加も可能だが、順位による豪華賞品がぶら下げられている以上、よほど奇特定のクラスでもなければ血眼になつて上を目指す。

ちなみに去年の優勝賞品は「七泊以内どこでも旅行権（課外授業扱い）」と「上級食券ひとりにつき百枚」、ついでに「嫌いな漫画をひとつ終わらせる権利」だった。

最後のは行使されたのか定かではないが、某誌某作が打ち切りになったのはこれのせいだとか風の噂でまことしやかに囁かれている。まあ何にせよ魅力的な商品があることは間違いなく、今回も熾烈な争いになることは目に見えていた。

ちなみにちなみに、俺は自分の鍛錬にかまけていたので去年の体育祭には参加していない。

「さて、しかし、いったいどれだけ上に行けばいいものやら？」

放課後、学園長から指示された難題を胸に、臨時営業超包子の力ウンター席でひとり頭を抱えていた。

何故ならば、最悪去年の成績を超えればいいだろう、と調べてみた結果、当時1-Aだった彼女らはほぼ上級生男子で占められていた上位陣の中で、なんと総合九位に食い込んでいたのである。

女子限定クラスとしては第二位で、総合六位が聖ウルスラのスポーツ特待生クラスであることを考えれば驚異的な成績だ。

学年が上がったことで効率的な相手が一学年分減ってしまっているし、もしかしてこれは相当厳しい課題なのではなかるうか。

「坂槻先生、面白い顔になっているヨ。悩み事力？」

まだ営業開始後間もない、それほど混雑していない時間帯だ。最後の仕込みを終えたらしい超がふらつと俺の前で足を止め、既に空いていたグラスにアルコールを注ぎ足す。

「ああ、超の頭脳でいい案が出ないかな、と妄想する程度には悩んでいる」

「無料で、とは言わないが聞くぐらいはしても構わないヨ」

「聞いてほしいのは山々だが、仮にも生徒との金銭授受は遠慮したいな」

「安心するといい、私が欲しいのは情報ネ」

「情報？」

「そう、編入以前のデータを全く持たない、とある大学生について」

……それってもしかしくなくても俺のことだよな。

なんだこの展開？

そりゃ超ぐらいのレベルで調べれば俺の出自が怪しいのなんか一発だろうけど、まさかこんなところで接触されるとは思ってなかった！

しかも目が笑ってないし。

ちよっとこれはどうしよう。

「……………」

「なにか不都合でもあった力ナ？」

「いや……どうしてそんなことに興味を持ったのか不思議だっただけだ」

「茶々丸のデータに目を通したから、と言えはわかってもらええると思うが」

そうでしたね。

ホントうつかり忘れてましたよ製作者様。

とするとなんだ、来年へ向けたスカウトの類か？

いや、俺とマクダウエルとの接触を知ってるんだ、バラされたくない、とかいった脅しと考えたほうが妥当か。

突然超の表情が緩む。

「フフ、やはり貴方は面白いネ。何故私と茶々丸の関係を知っているのか、というのを知りたいネ」

……ゴッド、貴様は何故俺をもっと賢く創りやがらなかったのですか。

見え見えな誘導尋問じゃないですか。

自分の痛くもない秘密を小出しにして相手の痛い秘密を探る、とても勉強になります。

「今日のところはこのくらいにしておくヨ。店も忙しくなってきたようだし、坂槻先生の悩みも体育祭が終わってからゆっくり聞かせてもらうネ」

「あ、ちょ」

ニヤリと悪い笑顔を残して身を翻す超。

虚しく突き出された左手だけが小さくなっていく超を追っていた。ああ体育祭終わってからだと意味がないっていかまさしく後の祭りというかもう俺は籠の中の鳥ですかそうですね

いました。

……まあ考えようによつては、ここで超とコネクションができた
つてのは幸運だったかもしれないな。

そうできつとそうだ。

そんな自暴自棄にも似た結論を出した俺は、注がれたままだった
紹興酒を一息で飲み干した。

目標は去年の成績を上回ること。

なのだが、実はそれ自体はそれほど難しいことではないことが判
明した。

極論すればこのクラスは超中学級どころか人間辞めてるメンバー
が揃っているわけで、運動能力に難のあるものは一敗を前提にして
全員リレーかなんかで出場条件をクリアしてやればいいわけだ。

その後はもう？ A無双ですよ。

ただ問題なのはそれを実行させると俺が教育者的にクズ野郎の烙印
を絶賛押印されてしまつたろうことは想像に難くないので、大っ
ぴらにその計画を発動するのは憚られる。

それに俺自身もそんな勝利至上主義のような悪辣采配は好きじゃ
ないし、何より祭りでそんなことをするのは無粋だろう。

楽しみながら、かつ上位を目指せるようないい方法はないものだ
ろうか。

——というようなことをもう少し柔らかい表現に代えてホームル
ームで話してみたのだが。

「確かにそれをやれば優勝も夢やないな」

「今年の豪華賞品は何だろうね？」

「友情？ 努力？ ハッ！ 求められるのは経過ではなく結果だよ、キミたち！」

「格闘技とかやってるから熱血系と思いきや、先生意外と策士だね

」

「旅行！ 食券！ 打ち切り権！」

「まあ楽しくても負けたら意味ないし」

「バカばっかです」

恐ろしく現実的な生徒たちの、欲望に塗れてギラついた視線が返ってきたとき。

俺はもう駄目かもしれない。

07 いくつかの前触れ（後書き）

遅くなりましたが更新です。

いくつか展開の候補書いてたらいつの間にか十日も経っていました。

なるべく早く次も上げて行きたいと思います。

体育祭の設定に関しては完全に創作です。今後原作で何か言及されたとしても一切無視を決め込みますのでご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968j/>

その時歴史は動いたか？

2010年10月21日22時41分発行